
続・惑星(ほし)の王子さま～途中で終わってます編

さとうかなあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・惑星の王子さま（途中で終わってます編

【コード】

N7633E

【作者名】

さとうかなあ

【あらすじ】

途中で終わってます。もしまとめたものを書き直すので、こちらはスルーしてくださいm（――）m

人生チカクカピン その1 (前書き)

大変ご迷惑お掛けしますが、本作を幾つかに分けることに致しました。なるべく読みやすい文章作りをしたいのですが……。それでもお読み下さるうという方……。心から感謝します。

登場人物については追ってご説明いたしますが、今回の主人公「鈴木」と同じ視点になって頂いて、「分からないことだらけ」からのスタートをします。

ただ、ローズ・ケアレ・スミスという女性について、

彼女は、古代には地球に咲く単なる薔薇びばらだったのですが、時空を自由に移動できる「王子さま」に出会い、彼のケアレスミスで「人間」になってしまった人物であります。加えて、王子が「平成の日本」に来る時に、ついてきちゃった人でもあります。結構強気で凶暴の気が強い、緑髪の色っぽい女性ということでご記憶頂ければ……。

2

あつ、忘れてた。鈴木だ。

鈴木は地球を救うためにやってきたエージェントなのに、記憶がなくなっちゃって、とりあえず警察官をやっている、ガニマタのつるぴかハゲの大男であります。(敬礼)

人生チカクカビン その1

「つるあああ！！！！！」

何時もそうであるように、事件は突然やつてくる。

「ぎゃおおお！！！！！」

平成の平和なカンジの日本の空から、イキナリ怪物が落ちてきた。『降りてきた』じゃない、まさしく落ちてきた。しかも、何かの反動で吹き飛ばされたと言っている。平べったい放物線の途中だけ・・を描いて、こげ茶色なのか黒なのか区別をつけるには速すぎる勢いで落ちてきた。

日本の空と言っても、鈴木が勤務する派出所の目の前、つまり東京のド真ん中に怪物は落ちてきたのだ。それも、ゴジランやウルルンマン並のデカさ。建築物及び人的被害は大大大！

しかし、だ。作用と反作用って同時に起きるものではないのか？何かの反動で飛んできたらしい怪物を吹き飛ばした『モト』が分らない。いや、モトなんか今はともかく、やれることをやらねば。

…と、鈴木は逃げ惑う人々と車の交通整理に身を投げ出している。命がけの交通整理だ。命がけの交通整理・・思えばそうある任務ではなかるう。「俺は全うしてみせるぜ！」鈴木のは心は燃えた。怪物はすでに瓦礫と土埃の中、体勢を立て直している。

「ちょっと待ちなさいよ！ 交通整理もイイけど、アンタならもつとやるべきことがあるでしょ！ 何の為の飯の姿なんだあー！」

と、女の声。どこから発しているのか分らないが、鈴木の耳には
ピンピン聞こえてくる威勢いせいの良過ぎる女の声。

「誰だ？誰だ？誰だー！」（メロディつけないで言ってます。）

「誰だ、じゃないよ。この声聞いて分らないようじゃ、アンタもお
終しまいだよ、リーダー。」

「リーダー・・・リコーダーよりも懐なつかしい響ひびき・・・」

「バカ言ってんじゃないつて、そんなヒマないんだつて！」

という声と同時に鈴木の目の前には女性の後ろ姿がパツと、まさ
しくパツと現あわわれた。

「ちくしょう！ 思ったよりタフだ」

先程から鈴木の耳に聞こえていた女の声だ。こいつだったか。し
かし女は次の瞬間、上空高く飛び上がると、怪物に向かつて突つっ込こ
んでいった。サ、サイア化している・・・（汗）

そして女が蹴けったのか体当たりを食らわせたのか、人間の視点で
は確認できないが、再ふたび怪物は放物線ほうぶつせんを描えがいた。

女は鈴木を知っているらしい。が、当の鈴木は交通整理をしながら
ら「エー、何だっけ何だっけ？」状態。解説者を一名付けて下さい
！！！！の気分。

あの人マジックの助手が雑技団員ですか？ と言いたくなるよう
な朱あしと銀色のチャイナなイデタチの女は、後ろで一つに括くった髪かみだ
けが重力を反映させて、再ふたび空中から鈴木の前に現あわわると呆あままれた風ふう

のため息をついた。

「ホントに王子サンの言ったとおりだ。マジ忘れてる。が、待ってられないから実力行使だ。悪く思わないでよリーダー。んじゃ、ケツ・キ　　ツク！！」

「んあああ　　！？」

鈴木の臀部でんぶに切り込む様な痛みが走る。と同時に地面が遠く遠く・
・っつて、鈴木がくるくる回りながら空を飛んでいる。思えば怪物と同じ放物線ではなかるうか。

っつていうか、鈴木の目に怪物がどんどん大きくなる。どんどんど
んどん、大きくなつてゆく！　そして次にはパーツしか見えなくな
るう　　！！　　パーツもデカくなる　　！　　もう鈴木の視界しかいには怪物
の手のみ、掌てのひらのみしか入らない。まるで鈴木はグローブおんぼに納まるう
としているホームランくずれのボールみたいではないか。

「んぎやあああ　　」

人生チカクカピン その2

「うおおおお　　！！！」

鈴木は激しい勢いで怪物に衝突・・・しないで、そいつの懐深く擁かれた!? ある意味『ナイスキャ　タッチ!　怪物!』だが、

「何で?　何でだ?」

もう鈴木 of 理解は及ばない。最初から及んでないが・・・。しかし、怪物との最初の接触で命は落とさなかったものの、生身の人間が数十メートル飛ばされりや、無傷とはいかないだろう。が、鈴木は無傷だ。ということは、「生身の人間」という前提を疑わなければならぬ。

「俺は何様だっ・・・じゃなかった、何者だっ?」

「だ・か・らっ!　じれったいんだって!!」

再び、激しい口調で先程の謎のカンフー女が現れた。&セツトになつてしまった鈴木と怪物に雷を落とす。落とす、落とす、落とすまくる。どうやって雷を誘引するのか分らないが、いちいち確実に命中するわ飛ばされるわ、

「お前!　公務執行妨害!　いや殺人未遂だぞっ」

と言いたいのには、セリフも出ない鈴木は涙目だ。もう上空はカミナリ様のお陰で窒素たっぷりだろう。地面の方は、女の無茶苦茶な攻撃のおかげでめっちゃくちゃ破壊されてるし。女一人で地球に優し

くない事をここまで・・・！　なんて言ってられない。事態の收拾に努めねば。警察官魂発動だっ！

「ああ、でも、その前に、胃がつ、ううう痛くなってきた・・・」

・・・ヤマネ発動だ。

逃げ惑う車と人々が入り乱れる新宿で、一連の事態を見つめる人影が2人。激しい爆風と振動で、崩れそうな「売物件」の看板を掲げた、めっちゃボロいビルの屋上で、妙に落ち着きを見せている。

「あれだから先輩はヒーローになりきれないんだなあ・・・」

「身体はホント、丈夫なんですネ。でも、宝の持ち腐れにならないければ良いのですが・・・」

黒いスーツで長い金髪をなびかせた細身の少年と、グレーの髪にグレーの瞳、グレーのスーツ、グレーの・・・（しつこいっ！）青年である。

人生チカクカビン その3 (前書き)

いくつかメールが届いてますのでご紹介します。

「いつも楽しく拝読しております。が、ローズさんはいつ活躍するのでしょうか」

「ローズさんメインでハナシを進めてください」

「ローズさんを出さないと、僕はもう絶対読みません」

「タイトルは“惑星のローズさま”でいいんじゃないかって?」

送信アドレスが皆同じなのですが、・・・長いものに巻かれるタイプ(つい積極的に)の作者は抗し得ませんでした。すみません。

人生チカクカピン その3

鈴木は尚も、怪物の懐でモガいている。ようやく気付いたが、鈴木は怪物の掌に擁かれていたのではなく、ミゾオチに食い込んでいたのだ。それを怪物は押えている。鈴木をでは無く自分のミゾオチをだ。

「なんでだ……」

すでに力の無い声で自問する。しかし、解説者ナシでは何も理解できないままである。が、まだ『最中』だ。まだ事件の『最中』なのだ。時間は止まらない。被害も止まらない。

「くそっ！」

ミゾオチ強打とカミナリ連打で怪物の動きは止まっている。今こそどうにかせねば！ しかし、「俺、何か出来たっけ？」チャンスを活かしきれない男。

「一段落したら王子さんに、も一回メンテナンスしてもらわなきゃだな、クソリーダー」

「なんだお前、態度も言葉も悪すぎだぞ！」

「あたしは協力してんだよ。さっさと覚醒してっ」

女は更に空中に稲妻を走らせる。

「まってっ、こら、口で説明しろ！ 何の為にっいてるんだよ、お前

の口はっ!」

「メシ食うためだ」

同時にカミナリが怪物 + 鈴木を貫く。

「ぎゃああああー か、身体が持たん!」

「持つ持つモツモツ! 充分持つ!」

「と、とりあえず攻撃止める。ハデな戦い禁止だ。不況の日本に打撃与えるなつ。と、特に、民間のビルはっ! 再生不能になったらどうするんだっ! 分かってんのかっ」

「昭和だったら、ヒロインなのにーっ。なんか湿気るなあ」

「いいんだっ。このバケモノの足の裏だけで何へーベイだっっ、何坪だと思っただっっ」

怪物の腹にめり込んだまま、無駄の多い会話をしている鈴木に、長い緑色のロープが忍び寄る。『リーダー』という言葉よりも、鈴木の短期記憶領域に保存されている『緑色・・・』

まさか!

人生チカクカビン その4

ビル十階建と同じくらいのデカさがある、怪物の腹はらにのめり込んだ鈴木に忍しのび寄よる緑色のロープは、先端せんたんからすべて生きているように、というか、ヘビそっくりの動きでもって何本も近ちか付ついてくる。

鈴木はどこか、ロープの巻きつきやすい、出っ張でつ張はっているところを探たんでいるようだが、昔のギャグアニメの地面じめんに落おちたキャラよろしく、人型ひとがたになってメリ込こんでいる状態では巻きつきようもないらしい。が、見つけた！ 頭かたと肩かたのつなぎ目の後うしろる側がわが若干隙間じやくかんすきまを作つっている。そこだっつ！ ロープは鈴木に突つき進すすむ。

「待まちて！ 待まちて！ 待まちて！ うぐぐぐっつっ」

ロープが巻きついた所は、まさしく首であった。

「まてえええゝ 死ぬううゝ」

「リーダー！！！！ 今、助けてやる！！！！」

またあのカンフー女が叫さけぶと、拒き否ひする間もなく例の、カミナリ！ カミナリ！ カミナリ！ 怪物ごと鈴木は吹っ飛ばされていく。……どこも助けてないだろう、ドンカン女！ と言いいたいところだが、もう鈴木に叫さけぶ気力は無い。近くにいる生物の中で、一番鈴木に優やさしいのは怪物なのでは？ という悲しい現実がそこにあつたりなかつたり……。

しかし一応、カミナリの効果か、緑ロープは鈴木的首くびから離れたもよう。目先めさきの難なんは去いった。人々を助ける前に、今、最もも気きの毒どくな

状態にある自分を救わねば！ が、鈴木 of 気持ちに火が点かない。
「他人の為」ならばやる気も起きようものだが、怪物に合体した場所から、周囲の人々の避難が終わった様子を見てしまうと、どこかもう“完了した”気分。なんかちよつとした、アキラメもよう。

「鈴木っ！ どうしたのっ!? 早くそんな所から降りなさい！
もうっ、手が掛かるんだからっ」

!!!ローズの声だ。見れば怪物の足元で叫んでいる。

「お前こそ、そんな所でうろろろすんな！ 踏みつけられたらどうすんだっっ!」

鈴木の声で悟ったように怪物は片足を上げる。ローズの真上で。

「リーダー！ バカじゃないの？ うすのろな怪物にヒント与えてどーすんのっ」

カンフー女だ。じゃあ、お前がローズを救出しろっ！ と言い出そうとした瞬間、ローズの上空にある3坪程の足は、地面に着地。

「ローズはっ？ あの女は？」

・・・どこにも見当たらない。・・・エ、まさかっ。

人生チカクカピン その5

ジ・エンド。

『バカな女だ。向こう見ずにも程がある。いくら凶暴でもこの怪物に踏んづけられたらどうしようもないだろう。』…鈴木はノドの奥に苦さを感じた。しかし、だ。全てがまだ、何も終わっていない。解決という言葉には到っていない。

が、何とっ！ 怪物の足の裏の一件もまだ途中であつた！ 怪物の足がモコリと持ち上がり始めたのだ！ 踏んづけ続けようとする怪物と、地中の何かとの押し合いだ。しかも、重力を味方につけている怪物の方が押されている。

「まさか!?!」

思わず鈴木は叫んでしまった。地中からモコモコツと見えてきたのは、人間大の緑色繭玉！ どんどん怪物の足を押しつけている。すごい、すごいじゃないかローズ。さすがに凶暴女だ。…と、なぜか鈴木の目に涙。なんかどっかで親心。そして…繭玉からは気分の良さそうな女の口上がっ！

「まさか、まさかと言われれば、期待に答えるこの私。ローズ！ スミス！ 銀河を駆ける…!」

が、「ぶぎゅっつ!!!!」…ローズさん、ちよつと自分の口上に酔いすぎたか？ 言葉の理解できない怪物は、またもやローズを踏みつけた。さすがに“トン”単位のバケモノでは繭だつてキツイだろう…。しかし、

「おーっほほほほ、甘い！ 甘いわ。怪獣ちゃん。私を誰だと思ってるの？」

再び出てきた！ 雑草根性ハンパない！ しぶとい強さだ、ローズ。すごいぞローズ。お前が四番バッターなら、世界は叫ぶだろう。『ローズ！』『ローズ！』『ローズ！』

この成り行き、怪物には分らないだろうが、ローズが満足気だからそれでいい。世界がそれを認めているっぽいし…。(っっていうか、どこらへんで世界なのかつ？) しかし満足ついでにローズのセリフは続く。

「こっつ見えても本をただせばアタシは植物。そしてっ！ 植物と地面は親和性が大なのよ。おーほほほほ」

何の決着もついていないが、空気だけはローズの勝利だ！ そして更に気分良くセリフは続く、

「アタシの髪で作り上げたこの繭玉。アンタみたいなカス怪物にどうこう出来るほど安くないのよ。見てらっしやい！」

言うのが速いかローズはサツと繭を解除！ 反動で、のけ反る怪物の両足へスルスルと緑髪を絡みつけ始めた。まるで凶暴化したラプンツェルだ。というか、異常に進化したプランツと言うべきか？ローズはさらに髪を細かく絡みつけながら、怪物の腰までスッポリと制覇した。ナンカまるで緑色のストツキングみたいだ…。

「どっすんだ。そんなコトして」

鈴木は理解できないが、事態は多分好転しているようだ。加えて緑の髪は怪物と鈴木の間隙にも入り込み、鈴木を押し出した。

「うおおお　　っ」

ポロツと怪物から離脱した鈴木はそのまま落下。そして、一応力ンフー女が飛来して上手にキャッチ。

「なかなかやるねえ、あの人」

この女をも感心させるのだから大したものだ、ローズ。と、鈴木が一人感心に浸っていると、下半身を完全にローズに支配された怪物は、のっしのっしと歩き始めた。

怪物の目は…涙目である。

人生チカクカピン その6

見た目にすぐく恥はずかしくなってしまうた怪物は、緑ストッキングのまま、6車線しゃせんの道路に沿そって、のっしのっしと歩んでいる。怪物の後ろには緑色のロープで繋がつながったローズが満足まんぞく気に歩あいている。どこかイヌの散歩・怪物バージョンである。ただし、飼かい主側ぬしがわのローズは、リードを手に持っているのではなく、頭みどりから緑髪がみをズーンと伸のばしてロープをつくり、怪物に繋つながっているのだ。

そして、うなだれた怪物を良く見れば、昭和の地球防衛隊ちきゅうぼうゐたいをめぐちや翻弄ほんろうした凶悪怪物きょうあくかいじゅうではないか。

が、何故なぜか平成にタイムスリップして、ローズ一人にストッキングを穿はかされ、こんなハズかしい状態になっている・・・なんとなく気の毒きどく。加くわえて、昭和ではよくやっていたポーズであった、両手を拳あげ、アタマを振り回まわし、『オレさまは強いぞー！！』的な覇は気きは、全く失まわれ、ローズに補導ほどうされ、うなだれたまま、多分ストッキングに強制きやくせいされ、連行れんこうされているのだ。

「しかし、どこへ？」

カンフー女おんなに地上じちじょうへ降おろされた鈴木は、成なり行ゆきを見るべく、怪物の歩く道路みちへ向むかいながらつぶやく。

全くローズの行動は先が読めない。まもなく鈴木鈴木の行く手てには「売物件うりぶつけん」という看板かんばんが、ハデに目立めだった、めっちゃめっちゃポロいビルが見えてきた。屋上おくじょうには前出まへでの男二人おとこふたり（長い金髪あけがみの少年と、どこからどこまでもグレーな青年）が立たっているのが見える。

「そろそろ・・・かな？ ハザマ」

「はい、ローズさん、意外と予定通りに動いてくれましたね」

「“意外”は失礼だよ。でも、暴走しなくて何より」

金髪の少年は、いわゆる『惑星の王子さま』である。

地球での仮名は『亀井リナ』（結構投げやり・・・）。深い青の瞳は、男女問わず吸い込まれそうな美しさをたたえている。が、ストッキング怪獣を見ている微笑みは、なかなかのS。しかし、物腰はすべて上品、すべて優しく・・・。

対して、グレーの青年。こちらは王子さまに『ハザマ』と呼ばれた男。気はあまり大きくなさそうだが、忠実さにおいては逸品！
加えて、只の人間ではなく、只の宇宙人でもない、不思議な男。常に王子と行動を共にするあたり、執事が付き人っぽいのだが。

人生チカクカビン その7

怪物は心ならずもボロボロのビルに向かって進む。そして、目の前に辿り着いたところで大きくジャンプ！ 思い切りビルの屋上に飛び上がった！

しかし、ビルは脆くも砂塵とともに崩れ、そのまま怪物もろとも地下までズブズブと沈んでいった。どういうことだ？ 鈴木疑問に答える者はいない。いや、いた。

「怪物用の落とし穴を作っておいたんです。お坊ちやまと私で」

鈴木が振り返ると、グレーのスーツを着た男が立っていた。

「お坊ちやまつて誰だ？」

鈴木の質問に、男は驚いた様子。

「王子さまですよ、お忘れですか？ 鈴木さん」

「え？ 君、俺の名前知ってるのか？」

鈴木は驚きと同時に不安に襲われる。何だろうこの嫌な感じは。

「私です、ハザマですよ。鈴木さんが先発隊として平成の地球に派遣され、その後、お坊ちやまと、ローズさんと、私が合流したんじゃないですか」

覚えてない！ 鈴木は本気で動揺しはじめた。

「その件は、この怪物を処理してから説明するよ」

声と同時に金髪の男が現れ、地面にメリ込んだ怪物目がけて、ナニやら掌大の丸いボールを投げつけた。すると、怪物の姿は“あつ”と言つ間に消え、ぶつけた丸いボール状のモノが、さっきの男の手元に戻ってきた。

「手品か？」

鈴木が驚いていると、金髪の男（王子）は優しい笑顔を向けながら、

「そんなカンジのものですよ。タネは簡単。このボールは“モンスターカプセル”と言って、弱った怪物を收容できるスグレモノなんです。サイズも関係なく收容できるし、持ち運びも便利だから、宇宙お茶の間ショッピングではロングランの人気商品なんですよ」

後半のコメントは、なんか嘘臭いぞと思いつつも鈴木は感心している。金髪男は説明を続ける。

「昭和のエージェントの手違いで、というか、僕とハザマが作った時空の隙間が完全に消えていなかったせいで、昭和で退治するはずの怪物が平成に現れちゃったんですけど・・・、昭和から怪物を追って来たサンドラに、怪物を弱らせる役目を頼んで、メデューサ・・・じゃなかったローズ・・・髪を自由にあやつれるローズに、怪物をここまで連れてきてもらって、僕とハザマで作った落とし穴で身動きを止めて、カプセルに收容した訳です」

「成程、あのカンフーカミナリ女は“サンドラ”というエージェントだったのか・・・で、これからどうするんだ？ その怪物」

鈴木の疑問はすでに自分から離れ、事態の処理に向かっている。
さすが！ 警察官！

「カプセルの開発者、僕の尊敬する博士に任せたいと思ってます。
今はM78星雲にお住まいですから、そちらにカプセルのまま送る
つもりです。悪いようにはしないでしょ。カプセル怪獣ミクラウ
スとかウインディみたいにご利用するか、帰れる故郷があれば帰して
やればいいのだし・・・」

何故か分らないが、鈴木は感動した。「そうだつ！ 地球では、
人間にとっては困る存在でも、怪物自身がそうなりたかつた訳では
ないだろう！ 俺も逮捕するだけの警官ではいかなのだああ！！」

・・・鈴木は自分のホントウの立場を完全に忘れたまま警察官魂
を燃え滾らせたのだった。

ところで、鈴木の本場の立場って？

人生チカクカビン その7（後書き）

登場人物について・・・

王子さま： とある星からやってきた十七歳の少年。地球の未来を託されているらしい。宇宙の人類からは「亜種」と呼ばれ嫌われている地球人の未来を握っている。容姿は秀丽。金髪の長い髪、深い碧い瞳、スラリと長い手足。全体的にスマートでありながら骨っぽさゼロ。フェロモン、ゼロ。ただ、性格が・・・ちよつとふざけがちで、S。はぐらかし名人。

鈴木： 本人は忘れているが、地球人を救うべく派遣された、とある星からのエージェント。王子さまのご学友で、彼からは「先輩」と呼ばれ、慕われている？ 身体は大きく、力持ちの熱血漢。地球での仮の職業は警察官だ。ヒーローの素質充分だが、地球に着いた時のトラブルなのだろうか、記憶に障害を起こしている。（ほとんど記憶喪失） 年齢二十代後半？

ローズ： その一の前書きで紹介した通り。自分中心で生きている、もと植物の女性。でも、王子さまの言いつけは何でも聞くという可愛い？ ところもあるもよう。年齢二十代前半か？

サンドラ： 昭和に派遣されていたエージェント。王子の命令で怪物の保護に動いていたが、基本、短気で粗野。だがカミナリを自在に操る超強力な女性。年齢十七歳。代々王家のお庭番にして 王子のご学友。（粗野なのに・・・）

以上。

あ、忘れてた。ハザマ。・・・うん、ハザマの説明はや
やこしいから、『今度』。

「おかーさん、『今度』っていつ？」

「『今度』って言ったら、『今度』だよっ」

「お母さんの『今度』はいつになるかわかんないようー」

「うるさいわね。お母さんは今忙しいのっ！ アンタ『宿題』
やったの？」

「うー！ー！」

人生チカクカピン その8

怪物の一件は一応の収束をみた。

バトルのあった現場上空には、ようやく幾つかのヘリが飛び、惨状の把握に努めているようだが、怪物と王子一行の痕跡は既に見ない。警察官である鈴木にとつては、上層部への報告という仕事が残っているが、王子一行の存在を伏せ、文章の書ける同僚に任せることにした。

最上層には王子の父であり、宇宙の支配者で、地球人の祖をつくった奴、いや、方である王様がいるはずだ（もちろん、地球人は事実を知らない。）が、アテにならないから・・・じゃなかった、念の為、誰が見ても怪しまれない内容にするよう指示も忘れない。

そして怪物の入ったカプセルは、ハザマによって手際良くM78星雲在住の博士に転送され、事実上の関係者である、鈴木・王子・ハザマ・サンドラ・ローズは安堵した。

戦い済んで、日が暮れて

と、哀愁を含んだ歌が流れそうな夕暮れ、瓦礫を背に、何気なく5人が立っている。ちよつと満たされた雰囲気。しかし、

「これって“戦隊モノ”のエンディングっぽくない？」昭和から来たサンドラがちよつと悪戯っぽく笑う。

「ホントだ。じゃあ、何かポーズでも取る？」王子も乗る。

「ポーズより、色ですね。キャラ的にやっぱり王子がレッドでしょうか？」と、ハザマ。

「うーん、僕は赤、あまり好きじゃないんだ。ブルーかブラックと
いうことで」「という王子の返事。」

「じゃあ、鈴木さんがレッドですね」「ハザマの指名に鈴木は」・・・
。把握できていないのか？

「それじゃあ、アタシはピンクに決まりね」

「ピンク　！？　何をもってピンク？　アンタ、グリーンでし
よー。戦隊知ってるの？　ピンクって女だよー」

ローズの立候補にサンドラが爆笑する。が、ローズも負けない。
自分のアタマを指差して、

「当然よっ。王子さまに、ちゃんとして、情報を入れて貰ってるんだ
からアタシ。分かって言ってるのよ。おーほほほほ！！！！　女性キ
ヤラと言ったらアタシ以外にいないでしょう」

サンドラの周囲で軽く稲妻が走る・・・。

「私も一応女だけどね」

こいつもピンクをやりたかったのか？　どうにもアホくさいケ
ン力だが、二次被害が起きてはいけない。が、王子さまはこの状況
を面白がっている様子。誰が止めるのか。

「まあ、お二人とも落ち着いて・・・」やっぱりハザマが間に入っ
てしまったが、

「アンタはグレーでいいのっ！…！」

あぁっ！！ ハザマに激はげしい落雷らくらいが…。

人生チカクカビン その9

残る問題は、鈴木の脳！

分っていることは。

鈴木の記憶障害は地球人として生きる範囲においては全く問題が無いということと、地球に派遣される以前の記憶一切が、今は空白になっていっているということ。それから、王子たちとの関わりに関する記憶も時間と共に消えていくということ。合わせて考えれば、宇宙人としての鈴木の記憶に異常が起きているということになる。

宇宙人と地球人。もともと一人なら何の問題もなさそうなものだが・・・。(事実、サンドラ等、他のエージェント達に問題は起きていない。)

「エージェント達の時空移動は、僕の星の科学局が担当だ」・・・王子はある程度、見当がついているらしい。

もともとエージェント達は効率的な時空移動を最優先としたため、身体は現地調達、精神のみ、記憶のみ、転送して移植するという、科学局の最先端技術を採用している。しかし、十分な検証もできてないし、(人ですから+薬品使用ですから)臨床も充分とれていないものを、イキナリ、思いっきり多用するなんて、やっぱり基本、軍人というのはリスクの多い職業なんだなあ・・・なんて、ため息ものらしいです。特に、工員だし。

結果、鈴木のように、訳が分らない目に合うヤツも出てくる。

ところで、人間をつくる材料は、ほぼ全て土から調達できる。つ

くりかたも、原子レベルから再構成すれば、あつというまの作業なので、非常に便利。しかも、万が一、現地人と恋愛・結婚という方向に行っても、身体が地球産なので、なんの問題もないというオマケつき。(勿論、「宇宙在住の両親に会ってください」とか「宇宙へ行って、親との同居希望」は不可になるが……)。ハナシが相当逸れました……修正、

という事で、一旦故郷へ戻って、科学局のポッドに保管されている鈴木の本体と、その周辺をチェックに行きたいところだが、お手軽転送をされた鈴木及びサンドラは、身体ごと地球を離れる訳にはいかないのです、特殊な移動手段を持っている王子とハザマが行くことに……。『それからローズ。彼女は……。どうしよう』王子は思わずため息。

『連れて行っても、置いていってもトラブルメーカーだし……。』と、心の中だけの一言。

人生チカクカピン その9 (後書き)

「うん。ちょっと飽きがきたかなあ・・・、暑いし、めちゃめちゃ暑いし。PC打つ作業も読む作業も、ダレますね・・・。」

「いえっ！ そんな事はありませんん！ ちゃんとお読みになつてる方に失礼ですよ」(ハザマ)

「その通りです。でも、お盆の渋滞を考えると・・・」(作者)

とにかくっ！

「酷暑お見舞い申し上げます」(< >) お身体大切にいいい！！
!

人生チカクカビン その10

「地球の時間軸で合わせましょう」

王子はそう言いながら鈴木すずきの腕うでに、白いセラミック状じょうのバンゲルをつけた。特に時計らしき表示も無く、ただ真っ白。

「これでどうなるんだ？」

鈴木は宇宙人の文化もすっかり忘れてる。

「僕とハザマも着けます。こうすれば、僕達が時空の狭間を通って別の星へ行っても、先輩と同時刻で連絡し合えますから、作業もスムーズなんですよ」

「成程」

良く分っていないのに鈴木はとりあえずの返事。

「じゃあ、僕達はこれで・・・」

王子とハザマは早速立ち去る気配。

「ちょっと待ってっつ！ アタシは留守番なのっつっ？？」

やっぱり口を挟んできたローズ。

「君は『亜種』では無いけど、地球産だからね。僕らの星に入るには検疫とか、いろいろ時間がかかるんだ・・・」

「それじゃ、アタシ一生、王子さまの星へは行けないって事っつ！？」

王子の説明に、ローズは結構な衝撃を受けている。（ちよつと思考が幼稚というか極端じゃ・・・？）ムンクの『叫び』メデューサバージョンになってるし。

ふいに、王子が何かを感じ振り返ると、そこには、ローズに対して完全に背をむけたハザマが・・・。もの凄く強く降りかかる威圧感に耐えているもよう。ローズの『がっかり感』が、完全に怒りとジェラシーに変化し、鋭くハザマに降りかかっているらしい。負けるなハザマ！ 耐えるハザマ！！

「『一生』なんて事はないよ。君を連れて行く時は、もっとゆっくり出来る時だと思ってるんだ。いろいろ案内したいしね」

「えっ！ そ、そんな風に考えて下さってたの？ ヤだ、アタシったら焦っちゃって・・・」

何をどう焦ったのかは知らないが、王子の口先親切発言にローズは百パーセント感動している。更に恥じらいまでみせているではないか。

『コイツ、相変わらずアシライ上手・・・真に受けると、ほんつとバカ見るよ』・・・と、口に出そうなところをグツと押えつつ呆れているのは、少し離れた所で一連の様子を見ていたサンドラであった。

お庭番の家系は、自分から発言しないのが基本らしい。

『それにしても……王子おうじのような相手あいてを恋愛対象れんあいたいしょうにしたら人生じんせい破滅めつだな。』
『……という言葉ことばが偶然ぐうぜんにも同時どうじに心こころに浮うかんだのは、王子おうじとローズ以外いがいの全員ぜんいんであった。

人生チカクカピン その11

「先輩。ひとつ確認するのを忘れてました」

王子が振り返る。バンゲルを着けたせいだろうか、鈴木は王子から若干の悪戯めいた脳波を感じた。

「言い直せ。“ひとつ意地悪するのを忘れてました”だろう」

「うわっ！ 凄い、鈴木さん！ よく分かりましたね」

鈴木という言葉に、王子では無くハザマが返事をした。当の王子は、その横で「くつくつ・・・」と笑っている。

「酷いなあ、ハザマ。『確認』だよ」

顔は否定してないが。

「僕の本名と先輩の本名、言えますか？」

「わからん」

即答だ。何しろ鈴木は既にこのテーマを捨てている。三十話以上前から分らないままなのだ。鈴木どころか、読者にも明かされていないし・・・が、

「あ つ？」

「どうしたんですかつ、鈴木さん」

頭を抱えショックを受けている鈴木に、八ザマが駆け寄る。

「思い出せないっつっ」

「いいんです。無理しないでください、鈴木さん」

「いや、分ったんだ」

「分った？ 分らないんじゃないや無くて、分ったんですか？」

鈴木は今、『惑星の王子さま』始まって以来、一番のショックを受けている。「自分の名前」までが出てこないのだから！！！！

「自分の名」まで分らなくなっているんだ……」

頭をかかえたまま鈴木はうなだれる。

「……そうでしたか。もしかして鈴木さん、“ユウばあば”という人物にでも会いましたか？」

「そんなワケねえだろ」

「八ザマ、こんなときに冗談は失礼だよ。先輩、僕の名をちゃんと教えなかったばかりに、こんなになっちゃったんだ。今更ですが、僕の名は“パク”です」

「全然ウソだろがっ」

「うわっ、鈴木さんっっ！ 巨大化してますよお

「！！」

確かに鈴木はズンズンと巨大化している。誰か『打ち出の小槌』でも使ったのかっ！ な訳あるまい。

「先輩、怒りなどで脳内が高揚すると覚醒するんですよ。魔人的に」

「今更じゃあ、遅すぎただけどねえ」

鈴木を見上げながらサンドラがため息をつく。

「まあ、でも、その辺の確認できたからよかった」

冒頭で王子が言った“確認”とは、コレだったのかっ？ 基本やっぱり意地悪なヤツ。それからだ、

「せっかくだから、先輩のお名前教えますね　っ」

巨大化した鈴木を見上げながら王子が笑って言った。

「『ダイス』ですよ。『ダイス』っ！ 僕の通称は『シエス』ですよっ！！ 聞こえましたか　？」

確かに鈴木の耳に、王子の声は届いたようだ。しかし次の瞬間！ バングルを着けない者も含め、足元の全員に鈴木の怒り充満な脳波が突き刺さった！

『コ・イ・ツ！ 踏んづけたるかっ』

人生チカクカピン その12

鈴木の怒りが充滿した思念が足元に到達すると同時に、サンドラからカミナリが、ローズからは緑の鞭が放たれた。いくら頑丈な身体からだの鈴木でも、両者の容赦ない攻撃はきつい。足元はスクわれ、全身しんに痺れが走る。

だが、鈴木鈴木の心はすでに別の所へ行っていた。

「ダイス・・・」

薄暗い視界の向こうに立つ誰かが呼ぶ。

「ダイス・・・」

誰の声だろうか？

サンドラとローズの破壊力で、鈴木は元のサイズまで縮小したようだ。いや、それ以前にそれは始まっていた。思えば、サンドラからの執拗な打撃も落雷も効果が無かった覚醒が、王子の言葉だけで起こったのだ。縮小もまた王子の言葉によるものかも知れない。意識を失いにく折れる鈴木にハザマがかけより抱きかかえた。サンドラもローズも・・・。

王子も傍らに駆け寄ったが、黙り込んだまま立っている。その瞳は遠くを見ているようだ。

「故郷へ行くのは取りやめだ」

王子がポツリと言った。

「え、でも鈴木さん。どうするんですか？」

ハザマは王子を見上げたが返事は無い。それに鈴木はハザマの腕の中でグタツと……まるで生命反応が無い。呼吸も脈も……。

「先輩の『心』、どこかに弾け飛んだみたいだ」

「……何ですか？ それ」

ハザマの質問に、王子は答える元気が無いようだ。よほどの事が起きたと見ていいだろう。とにかく、鈴木は、怪物騒ぎのドサクサに紛れて造っておいた秘密基地に運ぶことにした。

人生チカクカピン その13

秘密基地に運び込まれた鈴木は、ここでもしつらえてあった、天蓋付きのベッドに横たえられた。呼吸も脈も回復していない。ハザマは急いで救命装置を運び込むが、王子はそれを阻むように手を上げた。

「放っておいてくれないか」

「何言ってるんですかつ、一刻を争うんですよ！」

珍しくハザマが声を荒げるが、王子は無視をしたまま傍らのソファーに深々と腰をかける。瞳は相変わらず遠くを見ている。

「サンディー、悪いけど、何か飲み物欲しいな」

サンドラは黙って厨房へ行く。更にローズに声をかける。

「ローズ、ちょっと席を外してもらえるかな」

「いやよ」

即答だ。ローズだもの。

「アタシ、王子さまを見損なってよ！別に人間の一人や二人、どうなるうと構わないけど、なにかその態度、気に入らないわ」

一人や二人、どうなってもいいのかつ。いや、でもローズの怒りは本物らしい。

「どんなカスな相手でも、親切に扱うのが紳士ってものじゃない！
こんなツルピカハゲで、かに股で、バカでかくて、ビジュアル的に迷惑なのに、役にも立たない男だって、やることはやってあげるのが礼儀じゃなくて!？」

そっちに怒ってるのかっ！ っていうか、鈴木はカスなのかっ。

「ひどいですよっ！ ローズさんっ！！ そんな言い方ってないじゃないですかっ」

おおっ。ハザマが喰ってかかった。めずらしい。

「鈴木さんは、 magari なりに “仲間” なんですよっ！ カスじゃありません！」

ていうか、『 magari なりに 』って言ってるし。

「あら？ カスじゃなかったら何？ ダメ男？ ムダ男？」

「そういうことじゃ、ありません ！！！」

基本、口喧嘩（口じゃなくても）が苦手なハザマは、声の大きさを勝負に出た。

「あなた、自分と重ね合わせて、哀れんでるだけよ。自分のために怒ってるだけでしょ？」

ローズは平気でどこまでも言える女だ。もともと相性の良くないっぽい二人に、決定的な亀裂が入ってしまった。

「ちょっと待ってよ。二人とも」

王子が口を挟む。珍しい……。

「みんな静かにしてほしかったのに……」

そっちかい!?

「揉めるから、空気が乱れて困るよ。せっかく捉え掛けた先輩の意識、取り逃がしちゃった……」

「エエツ!!!」

人生チカクカピン その14

王子は、サンデイの淹れた紅茶を口にすると、ゆっくりソファーにもたれながら、すでに骸となったダイスの姿を見つめている。

ローズには読めなかった。王子がダイスにそそく視線にどんな感情が含まれているのか。少なくとも、悲しみや哀悼などという種類のものでは無いのは、確か。視線はダイスに置きながら、・・・何か思考は別のところにあるようだ。

「とにかくこのままでも仕方ない、ダイスを葬ってやろう」

「えっ」

さすがにローズでも、びっくり。諦め良すぎない？

「土葬でいいですか？」

サンドラの返事もどこか事務的。ローズだけが一人やきもきしている。が、何をどうしたら良いのかも分らない。そこへハザマが戻って来た。

「鈴木さんの本体は、異常無いそうです。機器類の誤作動は確認されていません」

「ありがとうございます、ハザマ」

王子はゆっくり立ち上がると、視線を再びダイスへ。しかし、感情の全くこもっていない視線。何か考えているのか？

「僕はすこし、ここで休みたい。悪いけどダイスを移動してもらえない?。」

王子がハザマに声をかけると、速やかにストレッチャーが運ばれ、ダイスはそちらへ「1」、「2」、「3」! の掛け声と共に移動された。そしてそのまま、王子以外の全員で土葬の準備に別室へ。

なんとというか、お亡くなりになった方への対応にしては、ちょっと尊厳無視な態度だが、王子には何か考えがあるのだろう。ということ、皆、素直に動いている。が、もし、本当になんかの考えもナシだったら・・・、いや、まさか、いくらなんでもそこまで。が、もし、本当になんかの考えもナシだったら・・・、いや、まさか、いくらなんでもそこまで。が、もし・・・。

土葬をする一同の心の中は、メビウスリング的というか、エンドレスに疑惑がグルグル回るのだった。

人生チカクカビン その15

漆黒の空間に漂う人影が一人。・・・だが、光さえ臙おぼろげ気で、はっきりと確認できない。

いや、確認する者さえいない。何か、濃密な十二カに包まれ、ゆらゆらと、良く分らない世界で漂っている心地よさが、鈴木を包んでいる。

闇と感じるのは、瞳を閉じているからだろうか？ いや、瞼まぶたでも、光はわかるだろう。が、ここには無い。瞼を開ける必要も感じない。開けてもきつと同じだ。開ける気がおきない。

重力も無い。

ここがどこなのか？ 自分は どうしてしまったのか？ どこへ行くのか？

ゆらゆらと漂う自分に不安も疑問も湧かない。ただ、こうしているのが気持ちいい。楽と言ってもいい。ずっとこうしていたい。

手も足も、・・・あ、そうだグラスンも、あるのかどうか分からない。身体とその外界の区別がつかない。触って確認するのもおつくだ。鈴木は、この人生始まって以来の気持ちよさと開放感のような不思議な感じを満喫している。

「人生始まって以来、というのは間違いですよ、先輩」

「・・・？」

「鈴木というのも止めましょう。ここは地球じゃないんだし」

「ん？」

「ダイス。しっかりしろ、ダイス」

「ん？ ああー」

別に目を開けた訳じゃないが、鈴木の本脳には、くつきりと、こういつ時に一番接触したくないアホ野郎の声、というか脳波が届いた。長あーい金髪と碧眼をチラリと感ずる。

「お前、シエスカ？ まだ、ここにいたのか？」

「いたんじゃありません、改めて来たんです。分りますか？」

「んー」

「先輩、ゆつくりしてると、僕までボーっとしちゃいますから、とにかく行きましょう」

「行く？ どこへ？」

鈴木は、『ふりだし』どころかもっと遠い、原点中の原点に戻ってしまったらしい。が、本人だけが、まだ、理解不能である。

もう、なんていうか、『理解不能キャラ』という称号を与えたいくらい。

人生チカクカピン その16

鈴木は、いやダイスは、金髪・碧眼のシエスというか、王子に引かれながら、漆黒の世界を移動している。どうやら浮上しようとしている感じがする。なんとなくだが……。

「先輩、どうして僕が迎えに来れたか分りますか？」

王子の問いかけに、すぐには何も思い出すことが出来ない。

「……さっぱりだ」

「でしょうね。僕もそうでした」

「僕も……？」

鈴木の脳が、ゆっくり動き出した。停止していた何かが動き出したようだ。シナプスもニューロンも、血液も……。

「僕を助け出した時のことを覚えてますか？」

王子は妙な質問をする。『助け出した？』……鈴木の深い処で小さな映像が浮かび始めた。

その日、ダイスは上官に呼び出され、その足で王宮へ向かうこと

になった。

「一介の武官にとっては、非常に光栄な事だ」

上司には、そう言われたが、ダイスにとっては不本意な命令だった。

「子供の相手ですかっ！」

つい、口を突いてしまったが、実際、子供の相手だ。引退後でもいいじゃないかの気分だった。日々の苦しい訓練と、緊急時の命がけの任務は、一人の子供の遊び相手をするためにやってきたんじゃない。まして、少数民族出身の自分が、ここまでやって来れたのは、業績を積むことで、故郷の仲間が、この王国から十分な保護を受けられるからだ。

それが、新しい任務が『子供の相手』。

あきらかに左遷じゃないか。

とにかく命令だ。・・・不本意な気持ち満載で、ダイスは宮殿に向かったのだった。

人生チカクカピン その17

しぶしぶダイスは宮殿に向かった。

宮殿の造りは…めっちゃめっちゃ豪華であった、それは当然といえば当然。星一つの王の住まいであつてもスゴイであるうが、ココは格が違うのだ。星雲をいくつもまとめる帝国の都の中心だもの。

それにしても、辺境しか知らないダイスにとって、ここは全てが珍しい、目に新しい。街全体が城と言つていいんだろうが、…人を呼びつけておいて何なんだっ！！

ダイスは全くもつて知らないものだが、『ゲーム』という単語がアタマの中に浮かんだじゃないかっ。上官の命令で、ここまで辿り着いたが、鍛え抜かれた彼でも驚愕の旅路であつたのだ。

まず、この星に到着するまえに、既にエイリアン連合との戦い。しかも、ただの移動だから、ダイスは丸腰と言つていいような装備しかなかったし、大体、普通は安全に通れるハズの移動空間に、理解不能な侵入方法で、理解不能なバケモノがしつこい程現れた。気合で乗り越えた。そうするしかないだろう。というか、そうして生き延びた。

絶対零度など、あつたの？ もっと下があるんじゃないの？ と叫びたくなつた異常な世界も。そして、「もうっ！ お料理していい…」と、諦めかけた熱砂の瓦礫群も、越えに越えた。

やっと『歴戦の勇者』になつた気分ですり着いた都は、「何かありましたか？」的な嘯いた空気を漂わせ、ダイスに入国を許可したのだ。

「オレ、確かに『王様』に呼ばれているんだよなあ…」

不安を感じる位、よそよそしい都…であり、王宮であった。まあしかし、『宮殿』という建築物で、ダイスが気に入った点があった。

デカイのだ。

造りが全体的にデカイ。

これは、巨大種族のダイスにとって、ありがたいコトだ。今まで、どこへ行っても最大の課題は『白兵戦』であって、更に『建築物内での交戦』であった。身を隠すにも不利、攻撃するにも、身動きの取り難い環境では、やはり不利。

その中で、少数民族の自分の『故郷』の為、あらゆる戦地の最前線に身を置いても生き延びて来たのは、彼が生まれつき身に付けていた『知覚』の異常とも言える程の発達によるものだった。

リーダーであり、ソナーであり、自分を取り巻くあらゆる物を即時に感じ取る、彼特有の能力。…それによって、生き延びてきたし任務を遂行できた。

まさかそれが、王様の呼び出しで最大限に生かされるとは思いもよらなかったが…。

人生チカクカピン その17 (後書き)

…すみません。

面白いハズのエピソード部分を飛ばしました…。

鈴木、いやダイス、ごめんよ、主人公なのに。

時間が出来たら、スピノフということで、いずれ又。

…主人公だのに(涙)

人生チカクカピン その18

ダイスが初めてシエスと対面したのは、この日だった。

陽光輝く王宮へ、一歩足を踏み入れた日。

大きな門、…のすぐ横の、超小さい門から門兵の視線をバリバリ浴びつつ、大きな身体を小さくして入った。背が周囲より一段高い者の悲しい所は、つい猫背になって成長してしまう部分であるうが、一際大きなダイスは、更に猫背を強め、低姿勢で中に入ったのだった。

…のに。入った途端、激しい矢の雨！

「うおおおおっ」

その時の彼にとって最もスキが大きかった上空から、何故か激しい矢の雨・雨・雨…土砂降りっ！！

「お、王宮だよな…」

信じがたいが、ハッキリ狙われていた。とにかく、死にもの狂いで逃げつつ進んだ。だって王様に会うという任務だったから…。

しかし、どうにか辿り着いた建物の扉が開いた瞬間。今度は、両壁から一気に槍が向かってくるっ！ダイスの動きを狙ったように、敵意むき出しで自動的に壁から飛び出してくる！！！！

「絶対おかしい！」

忠実・実直・素直な心、の彼でも疑問が出るだろう、そうだろう。ここまで疑わなかった方がヘンだろう。が、任務遂行を指してダイスは進む。

次に、悪意の廊下をクリアすると、「さあ、どうぞ」という貼紙がついた大きなドアが面前に現れた。どうする？ ダイス。イヤラシさ剥き出しの貼紙ではないか。が、『忠実・実直・素直な心、の彼』は、躊躇なくドアを開いた。

…やっぱり。広間には、ありえない姿のモンスターがいた。アリエナイ…という感想をだれもが漏らすであろう。アリエナイ…、蟻ありの姿とダイスの身体とを上手にブレンドされたような、見事にみにくいモンスターが、広間の中央に、大チェーンソー装備で待ちうけていた。

「めっちゃめっちゃだな・・・」

そろそろ感付いて当然な状態だが、『故意』だ。もっと前に分かっていただろうが、『故意』だ。

しかし、ダイスは進まねばならない。「くだらない」と思っても進まねば任務を全うできない。そうだっ！ 任務とは・・・、

「よ　　く聞いておけ！ 王族の中でも、唯一の嫡男であらせられる方の…隠し子であるお子様のお相手だ」

何話か前に彼の上官から聞かされた言葉である。

人生チカクカピン その19

マジダイス 対 蟻ダイス…。

だが、チエーンソー装備の蟻ダイスは、はるかにデカイ。ビル2、3階の高さはある広間の天井まであるような大きさ。対して、ダイスも巨人種とはいえ、他の種族と一回りか二周り程度のサイズだ。身を隠す場所も無い建物内で、どう攻撃を避ければいいのか。

など、ガチンコの状態で考える隙など与えられる筈も無く、蟻ダイスはチエーンソーを振り回す。しかも、他の足も抜き身の刃のように、鋭いスピードで、身をかわすダイスの足元を連続ですくいまくってくる。

一方、ダイスは、手元にあるアサルト・ライフルで、自分の進路を切り開くが、巨大蟻の吹き飛んだ身体は、ナマコかクラゲのように飛び散りながらも生きている。更に、じわりと寄り集まると、またもとの蟻ダイスに再生する。と、同時に又しつこい攻撃！

「^{ぎり}限がない」

アタマを打ち抜いても、胴体を吹き飛ばしても、すんなり再生しては襲いかかる蟻！ しかも、自分と同じ顔をつけて、撃たれる度に「キキ　　ン！！」という金属的な悲鳴を上げる。全く、自分の悪くなる相手だつ。

先の見えない消耗戦に入りつつあるこの場でも、ダイスは『任務遂行』を目指して諦めない。だが、全く疲れを見せない相手に、少しずつ追い込まれているコトも感じている。

「なんで宮殿にモンスターなんだ」

原点に戻って自問してみるが、・・・ただの愚痴だ。何か起きて、
ているのは明白だが、宮殿内部がこんな状態なら、外の兵士だつて、
のんびり門を守っている状態ではないだろう。が、実際、そういう
状況だから困ったものだ。

そんな考えが脳裏をかすめている間にも、かんたん間断なく戦いは続いて
いる。・・・さすがのダイスも、へばつてきた。どうする？ 奴は
全くダメージ無しだ。

人生チカクカピン その20

人間、生き延びる為に必要な最終手段は、「気合」や「気力」でもないらしい。何故なら、今、ダイスは「気」を失いかけている。

命令系統は、小脳だけが一手に引き受け、戦いを保っているのみ。

生命力、というか、生き延びる力は、「産まれつきの危機回避能力」に併せて、「徹底的に訓練され、身体の隅々まで染み込ませた戦闘パターン」の実行によって発揮されているようだ。

ダイスは、どちらにも優れている。

お陰で戦いは、・・・無駄に長引いている。

更にお互い、「次の一手」が無い。

よって、先に力尽きた者が敗者となるわけだが、相手のモンスター・蟻ダイスは、機械的に刃物を振り回し、集合離散を繰り返すだけで、全く疲れなど感じられない。

一方のダイスは、すでに弾は尽き、補助用のナイフ類は全くと言っていいほど、役にたたないでいる。信じるのは、自分の蹴りと拳のみ……。

時間の感覚もわからなくなっているが、多少の時は流れたようだ。ダイスは自分の粗い呼吸と疲労感でそれを感じている。が、『任務』だ。

しかし、そうして生じた僅かな隙を、モンスターは逃さず、ダイスの胸を刃で貫いたのだ!!!

どうして、そうなのか？

人は、命を失いかけたとき、全ての音を失うらしい。

そして、全てのものが、ゆっくりとくつきりと見える。

が、ダイスは自分の胸を貫いた刃を見つめたまま、後方へフワリと飛ばされるのを感じ、自分の身体がどうなっているのか、確認さえできないままだった。

視線は、煌びやかな大広間の天井を見たまま、動かすこともできない。

人生チカクカピン その21

ボウウウウ ン……。

精巧な匠の技と芸術の粋を極めただろう床や壁は、全て哀れな姿に成り果て、気の毒な鈍い音を、一度だけ吸収して、久しい静寂を取り戻した。

モンスターは、床の上に横たわり、完全に軀むくろと化したダイスを確認すると、ズルズルと身体を崩れさせ、一つの巨大なスライムとなった。色は無い。

完全に透明な巨大スライムが、ズルズルとダイスに近づく。程なくダイスを被い尽くすと、グシュツ・グシュツ、と嫌な音を立てながら、彼をゆつくり包み込んだ。更に、スライムと化したモンスターは、その身体を中心へ、ダイスを浮上させている。……消化しようというのか？

しかし、巨大スライムは、ダイスをまるで自分の核のように位置取ると、内包したまま、どこかへ移動を始めた。

「彼も同じだったか……」

別の部屋で、一連の様子をモニター越しに見ていた男が、深いため息をついた。

男とは、先ほどまで、厳しい戦闘をモニターで観察されていた男。ダイスをこの宮殿に招いた本人。つまり、惑星連合の王。ダイスが、戦いに勝ち抜く事を期待していたようだ。が、結果は残念な事に。

豪華な大広間の天井に届きそうな程の玉座に座り、プラチナの土台に、贅を尽くした宝飾品を散りばめた勺しゃくを持ち、黄金で輝く長服をまとっている。「いかにも」王者・らしいイデタチでありながら、表情は暗く、頬に陰さえ見せている。やつれの原因は、あのモンスターなのか？

「……少し、違うようです。……何となく、楽しいカンジがします」

王が驚きつつ、横にいる子供に目を移した。

「……同じでは、無い気がします」

「ど、どう違うのだ！」

「あっ……」

子供は、王に気圧けあつされたように口を噤つぶんでしまった。

「いや、いい。お前のせいではない」

王は、深いため息をつくと、付き人を呼び、自分の横に座らせていた少年を去らせた。

「今日はもういい。部屋でゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます」

少年は、深く礼をすると、無表情のまま、部屋を後にした。

王は、悲しみとも、後悔ともとれない複雑な表情で彼を見送ったが、ふと、彼の座っていた椅子に目をやった。

「あれが好んで座っていた椅子だ・・・」

一人、ため息をついた。王の脳裏には、金色の髪とキラキラした紺碧の瞳の少年が映し出されているのであった。

一方、部屋を出た少年は、王の愛を一身に集めたように、煌^{ホウ}びやかな長服を身にまとい、彼の歩く先には、幾重にも織物が敷かれ、最上の扱いを受けている。が、瞳は何も見てはいない。無表情のまま、案内されるまま、ただ歩いているのだ。

まるで、影が四肢を持ったように、立体化しただけのように。

グレーの瞳とグレーの髪。そして、アイボリーの肌の12・3歳位の少年である。

人生チカクカピン その22

グレーの少年は、定められたスケジュールをソツなくこなしている。毎日、たゆみなく……。

勉強も、着替え、食事、散策、読書、等等……。よどみなく、こなしている。受動的な生活において、これほど適応できている人間はいないだろう。但し、感情が全くない。予定が空いてしまった時は、ただ、座っている。何もせず。ただ、じっと座って、次のスケジュールが来るまで待っているのだ。

「気持ち悪い……」

最初、家臣たちは、全く自我の無いこの子供を怖がった。他人に害を与えることはないが、まるで生きている幽霊のようで、存在が怖いのだ。しかし、それを声にするものもない。「なぜ、こうなってしまったのか」も、知っているから。

先程、王より退室を命じられた後も、部屋に戻り、余った時間を、ただじっと夕日を眺めることについてやっている。「……眺める」？ 本当に眺めているかは分らないが、斜陽を受けながら、ただ、じっと窓の外に視線を向けたまま、じっと動かない。これが、この十二歳の子供の過ごし方。ただ、ごくたまに、

先程のように、心かどこか、奥の方で、感情らしきものが動く時がある。関連性はわからないが、王宮に巣食うモンスターが動き出した時。

但し、モンスターは、この宮殿で働く者には現れない……。ダイスのように、外部から招かれた者にのみ、攻撃的な現れ方をする。

理由は、分りようも、ないが。

「先輩！？ 何か感じましたか？」

記憶を失ったまま、暗闇の中を漂っていたダイスを引き上げようとしているシエスから、声というか、脳波を感じたダイス。

「少し、思い出した」

「それは、良かった」

「良い？ オレがモンスターに殺られた場面を思い出したんだぞ！
良いわけないだろ！」

「あー、そんな所、思い出しちゃったんだ」

「今になって気付いたが、あれは、お前が仕向けたんだな」

「うーん、そうかも」

相変わらず、シエスとはぼけるのが上手い。仮名リナの頃から、
とぼけるのが上手い。

「でも、殺ってはいませんよ。仮死状態にしただけです」

「・・・お前」

　　「ダイスは、いや鈴木は、いや、多分今、魂だけになっているだろう」「オレ」は、こうして死んでも王子にからかわれる運命にあったのだろうか？

人生チカクカピン その23

鈴木、いやダイスの脳裏に再び遠い映像が浮かび上がる。

巨大蛙の卵の核になったまま、薄暗い廊下を引きずられ、身体が移動しているのは感じながら、心は、深い闇の底へ沈んでいくまま、何も出来ずにいた。

真っ暗、多分1cm先も見えない暗闇。・・・しかも身体が自由が全く利かないというのに、不安も焦りも感じない。先ほどの戦いで、エネルギーというエネルギーを使い果たしてしまったからか？ いや、この闇特有の、温く、重力の薄い感じがそう思わせるのか？ とにかく、ダイスは、漆黒の底へ落ちながら、脱力の心地よさを味わっていた。いずれにしても、こうリラックスするのは、久しぶりなのである。

既に、使命の達成とか、生への執着なども・・・ない。思った以上に、こち良いのだ。

・・・しかし、いくら作者が飽きつぱくても、これがエンディングでは、何がどうなっているのか、さっぱりだ・・・の、ままである。更に、作者は、「笑っちゃう」の部分がないと、つまらない体質で、ここ数話の、過去を振り返った説明的部分は、自分の中では「終っている」ので、ちょっと単純作業じみて、「つまらない」のである。

「作者がつまらない」・・・これは、致命的だ。なにしろ、趣味

で書いているだけの、商業的でもなんでもない作品で、つまらなく
ては、どうしようもない。義理・人情・サービス精神、或いは、「
始めた物は、ちゃんと最後まで」という責任感で、やれる人は素晴
らしい&尊敬しますで賞を、陰ながら送ります（さと）と、したい
くらい、頑張れない。

ので、せめて、次のギャクが書けるところへ辿り着くのを、一番
近い目標に定めて、この心臓破りの坂を、ふらふらとしながら、マ
ラソンを続けるのであります。

さて、身体はスライムの中に置いたまま、謎の漆黒の闇を魂だけ
で流されているダイスは、ふと、少し先に『人』の気配を感じ取っ
た。が、感じたものの、四肢が無いのだ、どうする事もできない。

そのまま流れに身を任せていると、その『人』の方から近付いて
きた。

「よくここまで来れたね」

「ここまで？」

「そう、ここまで」

「ここ……って、どこなんだ？ あの世界か？ オレは死んだのか
？」

「うーん。死んではないと思うけど」

深刻な善の会話だが、相手は笑っている感じがする。

人生チカクカピン その24 (前書き)

・・・何とか、『悪魔の23話部分』を越えました・・・ふう。

人生チカクカピン その24

笑っているカンジの相手は、すんなりダイスの“心”を覆おつて来た。

「待てっ！ 気持ち悪い」

判らない相手が、ぴったりと“自分”に接触してくる事がこれ程気持ち悪いとは思わなかった。

「うわっっっ！ ゴメン、近付き過ぎたっ」

相手も焦って、離れたもよう。しかし、すぐに笑い出した。

「身体が無いって、可笑しい。あははは・・・こんな事になるんだ。あははは」

「何が可笑しいんだっ」

ダイスは、相手が笑う程、不愉快になってきた。何も分らない上に、ヘンな奴が笑っている。

「僕達、身体が無いんだ。身体から魂が取れちゃって、こんな暗闇をふわふわしてるんだよ。分る？」

「分らない・・・が、死んだのか？」

「うっん。本当に死ぬ人は、こんなところでウロウロしないみたい。一瞬で通り過ぎて行くもの。僕なんか気付かないし」

「・・・という事は、どついう事だ？」

「さあ？」

とぼけているのか？ 生物として焦らないのか？ 何だコイツはっ。

「でも、今日は、初めて他者と接触できたなあ」

何しみじみしてるんだっ！

「でも、可笑しいね。身体って大事なんだね」

「何を、当たり前のコトで感心してるんだ。意味わからねえ」

「身体って、他者と自分を区別する、大事な要素なんだなって実感したんだ」

訳分らない奴。

「皮膚とか・・・、自己と外界を区別する境界がしっかりしないと、危なく、キミとくつつく所だった。あははは・・・。で、感情はちやんと不快感を示すんだ。不思議だね」

「・・・」

変なヤツは、変なヤツだった。が、一呼吸分、間を空けるとポツリと言った。

「キミがダイスでしょ？ お祖父様がお招きになった人。王国屈指の戦士って聞いた」

「へ？」

「僕はシエス……、キミが僕を救いに来たんだね」

「へ？」

……ダイスは……めちゃめちゃ混乱した。解説者一名付けて下さいの気分であった。

人生チカクカピン その24 (後書き)

大分放置してしまいました。

ので、整理整頓いたしましたら出直します。

ここまでお読みくださった方すみません。またご縁があればいつか・
・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7633e/>

続・惑星(ほし)の王子さま～途中で終わってます編

2010年10月12日03時53分発行